

皆さんこんにちは、市川なつきと申します。

日本各地 19 大学にあるハビタットの学生支部キャンパスチャプターの1つ、京都外大ハビタットに所属しています。私は大学4年間を通して、仲間と一緒に、ハビタットのミッションである誰もがきちんとした場所で暮らせる世界の実現をめざし、国内外でのボランティア活動、啓発活動、募金活動をしてきました。その中で、タイとインドネシアでの海外住居建築活動に参加し、たくさんのホームオーナーさんたちと触れ合い、たくさんの笑顔を見ることができました。



壇上で体験談を話す市川さん

震災があってからは、ハビタットの復興支援に参加してきました。3月にキャンパスチャプターの仲間と一緒に街頭募金を始めてから、被災地でのボランティア活動や地元関西での写真展の開催など、この一年東北の皆さんのためにできることは無いかと考え、行動してきました。今日は、このような活動を通して気付いたことを、お話しさせていただきます。

2011年3月11日、世界中を揺るがした東日本大震災が起こり、人、車、家、そして町をも飲み込む真っ黒な津波の映像を見て私は、ただ少しでも多くの方が助かってほしいと願うことしか出来ませんでした。そして仲間と共に「今」、学生の自分達に出来ることは何かと必死で考え、ただテレビの前で願うのではなく、その思いを募金という形で届けたいと街頭に立ちました。

震災から2ヵ月後、自らの目でしっかり現実を見て、直接被災した方の役に立ちたいと思い、岩手県大船渡市、陸前高田市でのボランティア活動に参加しました。そこで目の当たりにした光景は、今も忘れることが出来ません。山積みになっている瓦礫の一つ一つが、かつては誰かの大事な物や家であったと思うと、苦しくなりました。そして被害の大きさに対して、私たちが出来ることはとても小さく感じました。短期間のボランティアとして限られた作業しか出来ない私たちに、被災した人々は皆、笑顔で“ありがとう、来てくれて本当にありがとう”と言ってくれました。その“ありがとう”の言葉が私の足を何度も何度も東北へと運ばせたのです。

そして震災から半年が過ぎる頃には震災の報道も減り、被災地以外では日常が戻り記憶も薄れていくようでした。しかし現地では、沢山の瓦礫が山積みそのまま残っており、多くのボランティアが必要とされていました。私は、そのような状況をより多くの人に知ってもらいボランティアとして活動してもらうため、ハビタット・ジャパンが派遣するボランティアチームのリーダーとして活動することを決めました。



石巻市牡鹿半島で
清掃活動をする市川さん

私だけでなく、キャンパスチャプターの学生メンバーの多くが、各大学もしくは全国で一斉に行った街頭募金に参加したり、ボランティアとして現地に赴いたり、報告会や写真展で人々に伝える活動を続けてきました。この機動力は、ハビタットのキャンパスチャプターが持つネットワークを生かしたからこそ発揮できたものだと思います。



市川さんの話に
真剣に耳を傾ける皆さん

私がこの1年間のボランティア活動を通して得た物、それは人と人との繋がりです。被災地で活動するなかで出会った人々から、たくさんの貴重なお話を聞きました。ボランティア活動をした家の方に感謝の言葉をもらおうと、それが私の力になりました。また、一緒に活動した仲間やであった人々は今の私になくってはならない存在になりました。これらすべては私を支えてくれる大切な絆です。

先日東北を訪れた際にはまだまだ多くの傷跡のこっていると感じました。長年住んでいた土地で何もかも流され、知らない人が集まる仮設住宅で一人暮らす人もいます。必要な支援も受けられないまま被災した住宅に住み続けている人もいます。私は今でも「忘れられるのが何よりも恐い」と話して下さった方の涙を、忘れることが出来ません。この現状を東北から離れて住む私たちは絶対に忘れてはいけないと思います。

2011年3月11日に世界中が抱いた被災地への思いをもう一度心に思い描いて見てください。私たちの気持ちを、力を東北へ。復興への支援はまだ終わってはいけないのです。

京都外大ハビタット 市川なつき